

マルクスの農業機械論

福留, 久大

<https://doi.org/10.15017/4474845>

出版情報：経済学研究. 45 (4/6), pp.283-313, 1980-07-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



マルクスの農業機械論

—— 一九世紀中葉英国農業との対比 ——

福 留 久 大

小稿は、『資本論』のなかでマルクスが英国農業への機械導入を論じている部分について、多少の検討を加えようとするものです。検討の要点の一つは、マルクスが、王立農業協会会長ピュージを引用しつつ、機械導入によって経営費が半減されたほどに穀物法廃止後の農業技術の進展は著しかったと述べている点に関して、マルクスが依拠したと考えられるピュージ論文では、当時製作されていた機械を導入すれば経営費の半減化が可能ではあるが、しかしそれが現実には普及をみていない旨が明記されていることを示すところにあります。可能性は存在しながら現実性に転化していないという事情の裡に一九世紀中葉の英国農業の一特質を見出すことができるのではないかと考えます。

ところで、都留大治郎教授還暦記念のための本号に、一九世紀英国農業技術を巡る小論を寄稿するに至るまでには、次のような偶然の力が作用しております。1979年4月12日から13日にかけて教授の還暦をお祝いする一つの会が催されましたが、その会に教授は頭髪を見事に剃って登場されました。辞典によると「剃る」とは、かみそりで根もとからけずりをとることを意味します。一九世紀英国農業技術において最重要の位置を占めていたのは、後述のように穀物刈取作業に関するものです。この穀物刈取においては、大まかに言って、小麦・ライ麦の冬穀の刈取には reap、大麦・燕麦の夏穀の刈取には mow という用語上の区別があり、reap とは半月状の小鎌である sickle による高刈を意味し、mow とは大鎌である scythe による根刈を意味します。第二次大戦直後までは大半の日本人成人男子は短髪であったのが、現在の日本では長髪が多くなり短髪はごくまれになりました。その短髪を高刈とするならば、還暦の頃の都留教授のそれは根刈と言えそうです。このような意味での根刈が還暦の行事であるか否か、つまびらかにしえないのですが、ただこのような英国農業での穀物刈取作業と日本人男子の頭髪刈取作業との比喻ゆえに、時間を充分確保で

きないままに、価値乏しい小論の作成は放棄したいという気持ちに度々陥りながらも、なんとか切抜けられたように思います。

枯木も山の賑わいで作品の未熟さを意に介さず提出させていただきます。

目 次

- (一) マルクスの叙述を巡って
- (二) 農業史家の叙述を巡って
- (三) ピュージの叙述を巡って

(一) マルクスの叙述を巡って

マルクス・A

マルクスは、『資本論』のなかで、一九世紀中葉の英国農業における機械技術の採用、それによる生産力の上昇を強調している。生産力の上昇の当然の帰結として、生産費の削減が説かれ、あるいは必要とされる労働力の減少が述べられることになる。

そのような叙述は、何箇所かにみられるが、代表例として、次の一文を採りあげてみよう。

「穀物法の廃止はイギリスの農業に異常な衝撃を与えた。非常に大規模な排水、畜舎内飼育や人工飼料植物栽培の新方法、機械的な施肥装置の採用、粘土地の新処理法、鉋物性肥料使用の増加、蒸気機関や各種の新作業機などの使用、いっそう集約的な耕作、これらのものがこ

の時代を特徴づけている。王立農業協会会長ピュージ氏は、新たに採用された機械によって（相対的な）経営費がほとんど半減されたということを断言している。他方では実質的な土地収益が急速に高められた。1エーカー当たり投資額の増加、したがってまた借地の集中が、新たな方法の根本条件だった。同時に、耕地面積は1846年から1856年までに464,119エーカー拡張された。といっても養兎場や貧しい牧場からたちまち豊かな穀物畑に変えられてしまった東部諸州の広大な土地は別としてのことである。同時に農業従事者の総数が減少したということは、すでに人々が知っているとおりでである。男女両性とすべての年齢層を含めて、本来の農業者について言えば、彼らの数は1851年の1,241,269から1861年の1,163,217に減少した。だから、イギリスの戸籍長官が『1801年以來の借地農業者や農村労働者の増加は、農業生産物の増加とはまったく均衡がとれていない』と言っているのは正しいのであるが、そうだとすれば、この不均衡は最近の時期についてはもっとずっとひどくなっていると言える。すなわち、この最近の時期には、農村労働者人口の積極的な減少が、耕作面積の拡張、いっそう集約的な耕作、土地に合体された資本と土地耕作に投ぜられた資本との未曾有の蓄積、イギリス農業史上に比類のない土地生産物の増加、土地所有者の地代収入の増大、資本家的借地農業者の富の膨脹と、手を携えて進んだのである。」（第1巻第7篇「資本の蓄積過程」第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」第5節「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」e「イギリスの農業プロレタリアート」より）¹⁾。

このマルクスの叙述が対象としている時期を確認しておきたい。始期は、「穀物法の廃止」の時点、つまり1846年頃である。耕作面積の拡張に関して、「1846年から1856年まで」ととられており、また農業者の減少に関して、「1851年」と「1861年」とが比較されている。さらに、1861年のものと考えられるセンサス報告書から「1801年以來の借地農業者や農村労働者の増加は、農業生産物の増加とはまったく均衡がとれていない」との戸籍長官の言明が引用されており、それにすぐ続けて、「最近の時期について」この不均衡の一層の激化が推定されている。ここで言う「最近の時期」とは、『資本論』第1巻の執筆時点を基点としてのことであるから、『資本論』第1巻の刊行時点、1867年より先行する時期であることは疑いない。とすれば、終期は、1866年頃である。

上のマルクスの叙述が、第1巻第7篇第23章第5節「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」e「イギリスの農業プロレタリアート」のなかにあることは前述の通りであるが、同じ第5節の最初の小節が、a「1846—1866年のイギリス」となっていることから、始期を1846年頃、終期を1866年頃と考えて大過ないことが察せられる。

このマルクスの叙述の内容を、圧縮して表わすとすれば、同じ小節、e「イギリスの農業プロレタリアート」の冒頭の一文そのものになると言ってよい。すなわち、こうである——「資本主義的生産・蓄積の敵対的な性格が野蛮に現われているという点では、イギリス農業（牧畜を含む）の進歩とイギリス農業労働者の退歩と

1) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *Karl Marx-Friedrich Engels-Werke*, Bd. 23, 1962, S. 705-

6, 岡崎次郎訳『資本論』大月書店刊, 第1巻883-4頁。

に優るものはない」²⁾。

一方に排水や施肥の大量化、家畜飼養の新方法・粘土地の新処理法・蒸気機関や各種新作業機の採用、耕作一般の集約化というような農業生産技術の進歩が述べられ、単位面積あたり投資額の増加、借地の集中の促進、耕作面積の拡張による農業収益の急速な増大が記されている。他方で「農業従事者の総数が減少したということ」は周知の事実だと言われている。これが、「穀物法の廃止」から1850年代にかけての時期、つまりマルクスの叙述が対象としている期間中の第一段階についての叙述内容である。その叙述内容の特徴を端的に示すために（マルクスがここで用いている言葉ではないが、通常の経済用語を使うと）、一方において、農業技術の質的量的増進による労働生産力の上昇がみられ、他方において、農業従事者数の減少による支払労賃額の抑制が果された結果（これはマルクスの使った言葉であるが）、「王立農業協会会長ピュージ氏」に依りつつ「新たに採用された機械によって（相対的な）経営費がほとんど半減された」ことを強調しているのである。

マルクスの叙述が対象としている期間中の第二段階、マルクス自身の言葉で示せば「最近の時期」についての叙述内容も、基本において第一段階のそれと同じである。一方において、耕作面積の拡張、耕作の集約化、土地合体資本と耕作投下資本の未曾有の蓄積、土地生産物の比類のない増加、土地所有者の地代の増大、借地農業者の富の膨脹などの事項が「イギリス農業の進歩」の指標とされており、他方において、農村労働者人口の積極的減少が「イギリス農業労働者の退歩」の表現とされているわけ

ある。

このマルクスの叙述は、労働生産力の上昇、その裏面としての生産費の低減を非常に鮮明に打ち出している。しかも、取扱っている時期は、「英国農業の黄金時代」と呼ばれる時代に属している。

そのために、英国農業の一九世紀中葉における発展を問題とする際に、日本においてもしばしば引用されることになる。管見の限りで例示すると、次のようなものがある。

(1) 西村孝夫

農業革命の進行は、工業革命の前提を準備するが、マニュから大工業への推転によって、大工業が、今度は、農業に対して最も革命的に作用する。農業における科学・技術の応用、機械の導入の基礎を大工業が与えるが、同時に、農業労働者のヨリ強度な過剰化を惹起し、ヨリ大なる地面への彼等の分散によって、彼等の反抗力を挫き、農業における生産力増大と流動化の増進とが、労働力の大きな荒廃を齎す。そして、持続的な土地の地力の収奪によって、豊饒度を減すのである。とくに上述の産業ブルジョアジーによる穀物法の廃止は、イングランド農業に遡大な衝撃を与え、大規模な排水・舎飼・人工的牧草の栽培の新方式・機械的施肥装置の採用、粘土地の新処理、鉦物性肥料の使用増大、蒸気機関その他の新作業機械の採用、集約的耕作などを生ぜしめる。機械によって、経営費は殆んど半減され、土地収益が急速に増加された。そのためには、投資額、したがって、借地の集中が、益々、必要となった。1846年以

2) Marx, a. a. O., S. 702, 邦訳, 878頁。

3) 西村孝夫『イギリス近代農業史序説』三和書房刊, 1957年, 233-4頁。

降の10年間に、農耕労働者の総数が、耕地面積の拡張に反して、減少している。(西村孝夫『イギリス近代農業史序説』, 1957年, 第4章「資本主義農業の確立」より引用。下線は福留)

下線部分には特別の註記はないが、これがマルクスの『資本論』における前述の叙述に由来するものであることは、両者を照合して容易に判明するであろう。「経営費は殆んど半減され」という一句が再録されていることから確認できるだろう。

ただし、次のことを断わっておかなければならない。西村は、上のようにマルクスによりつつ農業機械を基軸とした農業技術の導入を強調し、その結果としての農業労働者の削減、経営費の軽減に言及しているのであるが、そのことによって農業生産の特異な様相を看過しているわけではない。「農業における資本主義の発展は、工業における資本主義の発展と、相互规定的に進行するのであるが、しかも、なお、工業にたいする農業の資本主義的発展の本源的な立遅れは、資本主義的発展が進むとともに、ますます、拡大して行って、いわゆる資本主義的発展の不均衡性の最も顕著な形態とまる。」(前掲書, 234頁)。このような説明が加えられている。

(2) 渡辺 寛

新しい農業の展開をマルクスはこう特徴づけている。「穀物法の廃止は、イギリス農業に異常な衝撃を与えた。ひじょうに大規模な排水、畜舎内飼育や人工飼料植物栽培の新方法、機械的な施肥装置の採用、粘土地の新処理法、鉋物性肥料の増加、蒸気機関や各種の新作業機などの使用、いっそう集約的な耕作一般、これらの

ものがこの時代を特徴づけている」と。(大内力編著『農業経済論』, 1967年, 渡辺寛稿, 第1篇「資本主義と農業」第1章「イギリス農業の展開過程」より引用)⁴⁾

渡辺は、自ら明記している通り、マルクスの叙述内容を重視して、上記引用部分に続けて言う。「このような新生産方法の展開は、農業においても——工業にくらべればなお遅れていたとはいえ——資本主義的階級分解を推しすすめる結果を生んだ。というのは、大規模な排水施設、金肥、農業機械そしてそれらを総括する近代的経営は資金の乏しい小経営のよく採用しうるところではなかったからである。」マルクスの叙述している事項は、英国農業の特徴である三大階級構成成立の一契機として位置づけられている。

同時に、農業における新生産方法導入の困難もまた怠りなく指摘されている。いまそれを農業機械についてみると、次の通りである。「産業革命の花形である蒸気力による機械装置としては、農業にかんしては、20年代に、蒸気脱穀機、刈取機、撰別機が発明されているが、先駆的事例をべつとすれば、40年代に入ってからようやく普及するようになった。これらの機械は、定置できる脱穀機についてまず導入がすすみ、ついで蒸気耕耘機が使われるようになり、やがて刈取り、播種、採草などについても機械の使用がすすんだ。しかし、農業生産の特殊性からいって、こうした機械の恒常的使用はほとんど不可能だったから、農業資本家もこれを購入するよりは、むしろそうした作業を専門とする会社に請負わせるという傾向が強かった。ま

4) 渡辺 寛「イギリス農業の展開過程」, 大内力編著『農業経済論』, 筑摩書房刊, 所収, 1967年, 90-1頁。

た蒸気脱穀機などはもっとも広く普及し採用されたものであるが、それでもウェールズ高原地帯では、90年代でも穀竿 (flail) による脱穀が一般的であったといわれる。こうした後進性は、むしろ農業生産の特殊性に由来するものであるが、土地所有と資本とのあいだの特殊歴史的な関係によって、それが助長されていた。」(前掲書、87—88頁)

(3) 毛利健三

K. マルクスは、穀物法撤廃後のイギリス農業の発展にふれて、つぎのようにのべている。「極めて大規模な排水や、舎飼および人為的秣栽培の新模式や、機械的施肥装置の採用や、粘土地の新処理や、鉋物性肥料の使用増加や、蒸気機関および凡ゆる種類の新作業機などの使用や、より集約的な耕作一般が、この時代を特徴づける。王立農業協会会長ピュージー氏の主張によれば、(相対的)経営費は新たに採用された機械類によって殆ど半減された」(傍点—引用者)と(『資本論』青木文庫版、第4分冊、1042頁)。いつものことながら、かれの周到かつ鋭い考察は、ハイ・ファーマーミングの全姿容を把握している。(川島武宜、松田智雄編『国民経済の諸類型』、1968年、毛利健三稿「産業資本確立期におけるイギリス穀作農業の発展——一九世紀前半の農業不況とハイ・ファーマーミングとをむすぶ二、三の問題点——」より引用。傍点は毛利によるもの)⁵⁾

毛利によって、マルクスの叙述は、ほとんど留保なしに、「労働生産性の上昇や労賃コスト

削減」に焦点を合わせて用いられている。上に筆者が引用した部分は、次のような記述に添えられた註記なのである。「一九世紀前半からハイ・ファーマーミングへかけてのイギリス農業の発展は、たんに投下資本の増大による土地生産力の増大や播種面積の増大のみにつきていたのではけっしてないのであって、諸形態における労働生産性の上昇や労賃コスト削減もまたこの過程で執拗に追求されていたのである。ハイ・ファーマーミングにおける農業労働生産性上昇の側面は、比較的目立たない側面ではあったけれども、この面が無視されてよいわけではない。ちょうど一九世紀の中葉に筆をとったJ・ケアドはこうのべている。『土地を肥沃にする新しい肥料を科学が指示し、商業が利用可能にしている。工学上の技術が機械製造に應用されて生産費の削減と労働者の苦痛の軽減とに役立てられている。収穫機は、どの点からみても、その成功的応用の展望をもって導入されてきている。蒸気機関も農業の諸過程を低廉化するというその効用を年々拡大してきているし、多年を経ずしてそれが土地の直接耕耘への応用に成功するようになるであろうと信ずるに足るあらゆる根拠がある』、と。まさしく一九世紀中葉に農業にも機械が導入されつつあったのであり、それは、資本制的機械化の最大の目的である単位労働者当賃金額の低減(そうじて生産費の低減)に大きく貢献しつつあったのである。」(前掲書、147頁)。

毛利も、農業機械の普及の困難に全く言及していないわけではない。例えば、次のような記述が見受けられる。「蒸気を動力とする犁(the steam plough)は、『一九世紀中葉までに、営利的に使用されるようになりつつあった』、という。もっともその普及度は、1867年

5) 毛利健三「産業資本確立期におけるイギリス穀作農業の発展」、川島武宜・松田智雄編『国民経済の諸類型』、岩波書店刊、1968年、所収、148頁。

に、蒸気犁で耕耘される耕地が1200万エーカー中20万エーカーであったというから、わずか2%弱にとどまる」。ただ、毛利は、すぐ続けてこう言う。「それにもかかわらず、この事実がイギリス農業史上有する画期的な重要性をわれわれは重視したい。」(前掲書、147—148頁)。

したがって、ここでは、農業における機械化の進展とその効果を高く評価する姿勢が堅持されているのであり、マルクスの前出の叙述が対象としている時期、1846年頃から1866年頃において、既に、農業において労働生産性の上昇、資本家的労働節約の達成を認める見解が述べられることになる。すなわち、次の通り——「一九世紀前半においても、たんに脱穀労働のみでなく、収穫、干し草作り、その他の基幹的農業労働過程においてもまた、労働生産性のいちじるしい上昇、すくなくとも、協業規模の拡大による労働期間短縮化をつうじて、資本家的労働節約の効果が達成されつつあったことには疑問の余地をのこさないのである。こうした種々の形態における農業労働の生産性上昇は、一九世紀前半の諸不況をつうじて強制された結果であり、それがハイ・ファームングにおいて全面的に開花し結実することになるのである。」(前掲書、152—153頁)。

マルクス・B

一九世紀中葉の英国農業に関して機械導入とその効果という観点からなされたマルクスの叙述、第二例。

「農業での機械の使用は、それが工場労働者に与えるような肉体的な損害をもたらすおそれはほとんどないが、あとで詳しく見るように、

それは農業では労働者の『過剰化』にいつそう強く作用し、また反撃を受けることなく作用する。たとえばケンブリッジ州やサフォーク州では、耕地面積は最近20年来非常に拡張されてきたが、農村人口は同じ期間に単に相対的にではなく絶対的にも減少した。北アメリカ合衆国では農業機械はしばらくはただ可能的に労働者にとって代わっただけだった。すなわち、農業機械は生産者により大きな地面の耕作を許すが、現実に従業労働者を駆逐してはいないのである。イングランドとウェールズでは1861年には農業機械の製造に従事していた人員の数は1034だったが、蒸気機関や作業機を用いて従業していた農業労働者の数はわずかに1205だった。」(第1巻第4篇「相対的剰余価値の生産」第13章「機械と大工業」第10節「大工業と農業」より)⁶⁾。

対象とされている時期は、「最近20年来」という言葉から、1846年頃から1866年頃までと判断される。叙述されている内容は、一方に耕地面積の拡張があり、他方に農村人口の絶対的減少があるという構成になっている。その点は、前出の第一例と共通しているが、第二例では、対象地域が、ケンブリッジ州やサフォーク州と特定されている点が異なる。

それはともかく、全体の文脈から判断すると、耕地面積の拡張と農村人口の絶対的減少の二つに触れながらも、マルクスが力点を置いたのは、後者の農村人口の絶対的減少を惹起する要因(マルクスの論理に添った表現を用いれば、農業生産に必要な労働者を減少させ労働者の「過剰化」に強く作用する要因)として、農業機械をとりあげることだった。そして、まず

6) Marx, a. a. O., S. 527-8, 邦訳, 655-6頁。

アメリカ合衆国を例として、「農業機械はしばらくはただ可能的に労働者にとって代わっただけだった。すなわち、農業機械は生産者により大きな地面の耕作を許すが、現実に従業労働者を駆逐してはいない」と、労働者の相対的減少が述べられている。それと対比する形で、続けてイングランドおよびウェールズの例がとりあげられているので、文章の構成上からみても、そこでは労働者の絶対的減少が強調されるべきである。しかし、マルクスの文章の当該部分は、必ずしも文意が明快ではない。「イングランドとウェールズでは1861年には農業機械の製造に従事していた人員の数は1034だったが、蒸気機関や作業機を用いて従事していた農業労働者の数はわずかに1205だった」というように、農業機械製造従事者数と農業機械使用従事者数とが比較されているが、その比較の意義はどこにあるのであろうか。農業生産に必要な労働者を減少させ労働者の「過剰化」に強く作用する要因として農業機械が問題とされているのであるから、具体的数字をあげるとすれば駆逐された労働者に関する数字でなければならぬのではなかろうか。農業に従事する全体の労働者なり、農業機械を用いて従事している農業労働者なりについて、二時点間の減少を示す数字であってこそ、はじめてここでのマルクスの主張を裏づける意味をもちうるだろう。

現にマルクスが記述している通りに、「蒸気機関や作業機を用いて従事していた農業労働者の数は1205だった」と、1861年時点の数字だけをあげたのでは、マルクスの意図を裏切って、ただ農業機械の普及の低さを示す結果に終るおそれさえある。先にマルクスの農業機械の導入とその効果に関する叙述の第一例として示した部分、第7篇第23章第5節eから収録

した部分には、「本来の農業者」が1861年に1,163,217人存在した旨が明記されている。またマルクスの叙述の第二例として目下検討している部分が属しているのと同じ第4篇第13章の第6節「機械によって駆逐される労働者に関する補償説」のなかには、1861年の「農業労働者（牧夫、農業者の家に住む農僕および下婢を含む）……1,098,261人」⁷⁾という数字が記載されている。これらの数字と対比して農業機械使用労働者数1205人が挙げられると、その比率0.1%となって、農業機械使用が極めて稀であり、その普及定着が大変に困難であることが浮彫りされるわけである。

マルクスの叙述の第二例において、彼は、「イギリスの農業で使用される農業機械の詳細な記述は、『イギリスの農具と農業機械』ドクター・W・ハム著、第2版、ブラウンシュヴァイク、1856年、Doctor W. Hamm, Die handwirtschaftlichen Geräte und Maschinen Englands. 2 Aufl., Braun-schweig, 1856.に見いだされる」と註記している。上記の不可解な数字等についても、この著作から採られているのかも知れない。この著作を閲読できれば、マルクスの叙述の不明な個所にも照明が当てられる可能性があるが、筆者には今のところその機会が得られないままである。

ここでは、マルクスの叙述の要点が、1846年頃から1866年頃にかけての農業機械の使用とそれによる労働者の駆逐を強調するところにあることだけを確認しておきたい。

マルクス・C

一九世紀中葉の英国農業に関して機械導入とその効果という観点からなされたマルクスの叙

7) Marx, a. a. O., S. 470, 邦訳, 583頁。

述、第三例。

「1849年と1859年とのあいだには、穀物価格の下落と同時に、実際的に見ればただ名目的でしかない賃銀引き上げがイギリス農業地方に現われた。たとえばウィルトシャでは週賃銀が7シリングから8シリングに、ドーセットシャでは7シリングか8シリングから9シリングに上がった、等々である。これは農業過剰人口の異常な流出の結果であって、この流出は、戦争のための需要、鉄道や工場や鉱山などの大拡張によって引き起こされたものだった。労賃が低ければ低いほど、ほんのわずかな労賃の上昇でも百分比ではそれだけ大きく表わされる。たとえば週賃銀が20シリングのとき、それが22シリングに上がれば、10%の上昇である。ところが、たった7シリングだったのが9シリングに上がれば、28 $\frac{4}{5}$ %の上昇になり、たいしたことのように聞こえる。とにかく借地農業者たちはわめきたて、『ロンドン・エコノミスト』までがこの飢餓賃銀について大まじめに『一般的で実質的な値上がり』（“a general and substantial advance”）だとしゃべりまくった。そこで、借地農業者たちはどうしたか？ 彼らは、独断的な経済学的な頭のなかでの成り行きのように、このすばらしい支払のために農業労働者が増加して彼らの賃銀が再び下がらざるをえなくなるまで、待っていたであろうか？ 彼らはより多くの機械を採用した。そして、たちまちのうちに労働者は借地農業者をさえ満足させるほどの割合で再び『過剰』になった。今度は、以前よりも『より多くの資本』が、しかもより生産的な形で、農業に投ぜられた。こうして労働にたいする需要は、ただ相対的にだけでなく、絶対的にも減少したのである。」（第1

巻第7篇「資本の蓄積過程」第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」第3節「相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産」より）⁸⁾。

「たとえば1849—1859年にはイギリスでは農業労働者の労賃は次のような圧倒的な諸事情の併発の結果上昇した。というのは、アイルランドから外国への移住が行なわれてそこからの農業労働者の供給が断たれたこと、製造工業によって農業人口が異常に吸収されたこと、戦争のための兵員需要があったこと、オーストラリアや合衆国（カリフォルニア）への異常な移住が行なわれたこと、そのほかここでは詳しく述べられていないいろいろな原因である。それと同時に、1854—1856年の不作を例外として、この時期には穀物の平均価格は16%以上も下がった。借地農業者たちは地代の引下げを求めて叫んだ。個々の場合には彼らが成功したこともあった。だいたいにおいて彼らはこの要求では失敗した。彼らは生産費の引下げに逃げ場を求め、なかんずく蒸気機関や新しい機械の大量採用によってそれをやったのであって、これは一部は馬にとって代わって馬を経営から追い出したが、しかしまた一部は農業日雇労働者を遊離させることによって人為的な過剰人口をつくりだし、したがってまた新たな賃銀低下をひき起こした。そして、こういうことは、この10年間には総人口の増加に比べて相対的に農業人口が一般的に減少したにもかかわらず、またいくつかの純農業地方では農業人口が絶対的に減少したにもかかわらず、起きたのである。」

以上の註記。「ジョン・C・モートン『農業で利用される諸力について』。これは1859年にロンドンの技芸協会で行なった講演で、スコッ

8) Marx, a. a. O., S. 667-8, 邦訳, 831-2頁。

トランドの12州およびイングランドの35州から約100人の借地農業者について集めた信頼できる記録にもとづくものである。」(第3巻第6篇「超過利潤の地代への転化」第37章「緒論」より)⁹⁾。

第三例としてあげたふたつの引用部分において、ともに「1849—1859年」の農業労賃の上昇が、議論の出発点とされている。それに続けて、借地農業者による機械の採用が多く生じたと説かれ、議論の帰着点は、農業労働者の「過剰」化・「遊離」化による農業労賃の再下落に置かれている。したがって、先にみた第一例、第二例とともに、同様の時期を対象として、同様の論理を展開している、ということが出来るだろう。ただ、多少とも第三例に特有な面があることも指摘しておきたい。それは、第一例と第二例においては、農業資本家が積極的に機械その他の技術革新に努めて、敢えて農業労働者の「過剰」を惹起すると考えられているのに対して、第三例では、農業外部の力によって農業労働者の流出、農業労賃の上昇が生じて、そのために農業資本家は機械その他の技術導入を強いられ、いわば消極的な形で農業労働者の「遊離」を画策すると考えられていることである¹⁰⁾。

9) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, *Karl Marx-Friedrich Engels-Werke*, Bd. 25, 1964, S. 641-2, 邦訳, 第3巻811頁。

10) 尚、この第三例としてあげたふたつの引用部分は、第3巻第6篇第37章からの引用部分にマルクスが註記している通り、ジョン・C・モートン『農業で利用される諸力について』John C. Morton, *On the Forces used in Agriculture*, *Journal of the Society of Arts*, Dec. 9, 1859. に基づいている。このモートン論文をマルクスは、『資本論』において重用しているが、それだけでなく、『資本論』執筆と並行して1865年に執筆され、マルクス死後刊行された『賃銀、価格および利潤』においても、第三例として示した

以上でみた第一例から第三例に及ぶマルクスの叙述を通じて、マルクスが次のような主張をしていたことを確認できると考える。すなわち、穀物法廃止の1846年から『資本論』刊行の前年・1866年までの時期において、「資本家的借地農業者たち」(kapitalistische Pächter)は、「蒸気機関や各種の新作業機などの使用」(Anwendung der Dampfmaschine und aller Art neuer Arbeitsmaschinerie usw.)、「蒸気機関や新しい機械の大量採用」(massenhafte Einführung des lokomobilen Dampfs und neuer Maschinerie)によって、農業生産を増加させつつも、労働需要を減少させて、「農村労働者」(Landarbeiter)、「農業労働者」(Agrikulturarbeiter)、「農業日雇労働者」(Ackerbautagelöhner)を「過剰に」(überzahlig)成らせる。このような労働者の「遊離化」(Freisetzung)「過剰人口化」(Übervölkerung)を槓杆にして、労賃の低下、生産費の削減が実現された。それを裏づけるものとして、「王立農業協会会長ピュージ氏は、新たに採用された機械によって(相対的な)経営費がほとんど半減されたということを断言している」“Der Präsident der königlichen Gesellschaft für Agrikultur, Herr

文章と同じ対象を扱い、ほぼ同じ趣旨のことを、より詳細に叙述している。筆者は、かつて、そこで叙述されている事項を、「農業の労賃」「小麦の価格」「機械の導入」「耕地牧場化」「農場の規模」「人口過剰化」の順序で追跡調査したことがある。(「一九世紀中葉英国農業における資本蓄積の特質——『賃銀、価格および利潤』中の一題材に関して」、九州大学教養部『社会科学論集』第14集, 1974年3月刊)。またその際モートン論文も訳出して資料として付しておいた。双方とも不十分なものであるが、ここで第三例として示した文章にもそこで関説しているので、いまは第三例に関する委細は、(後述部分で「機械の導入」に言及するばあいを例外として)おおむね省略に委ねることにする。

Pusey, behauptet, daß die (relativen) Wirtschaftskosten durch die neu eingeführte Maschinerie beinahe um die Hälfte verringert worden sind“ という事実がある、と。

(二) 農業史家の叙述を巡って

筆者の旧稿より¹¹⁾

穀物法廃止から約20年間の英国農業において、借地農業者が、マルクスの言うように、機械導入によって相対的過剰人口を作りだしたかどうか、農業労賃の抑制に成功しえたかどうか。

この問題について、筆者は、諸農業史家の見解に基づいて次のように疑問を表明したことがある。疑問の要点は、ひとつには、農業機械の普及は部分性を免れていなかったと考えられること、したがって、ふたつには、労働力を積極的に放逐するところまでは速く及ばなかったようであるということ、に求められている。

「この11年間(1849—1859年)にあらゆる機械を取り入れた」ということについて。「産業革命の花形である蒸気力による機械装置としては、農業にかんしては、……先駆的事例を別とすれば、40年代に入ってからようやく普及するようになった。これらの機械は定置できる脱穀機についてまず導入が進み、ついで蒸気耕耘機が使われるようになり、やがて刈取り、播種、採草などについても機械の使用がすすん

だ。」(渡辺 寛)¹²⁾。こうして例えば「脱穀機の利用が農業労働者の冬期間の雇用に久しく圧迫を加えたり」「1860年代までには機械使用が夏期間の労働需要を大いに減じて、そのために農業労働者の妻君たちが働きに出ることがぐんと少なくなったり、子供たちが従来より長く学校で過ごすようになった。」(チェインバーズ&ミンゲイ)¹³⁾。「しかし、農業生産の特殊性からいって、こうした機械の恒常的使用はほとんど不可能だった」(渡辺 寛)¹⁴⁾ ため、その拡大普及は部分性を免れず、例えば「1867年において1200万エーカーの耕地中蒸気耕耘機によって耕やされたものは20万エーカー(つまり2%弱)だった」(ロング)¹⁵⁾ という状況、刈取機は1859年頃で4000台で(モートン)¹⁶⁾、イングランドおよびウェイルズの100エーカー以上の経営約7万に対して6%、(全経営約21万に対して2%弱)——無論請負作業も存在するので、実際の比重はこれより高まるだろう——の普及率という状況に留まっていた。「これら

12) 渡辺 寛, 前掲書, 88頁。

13) J. D. Chambers & G. E. Mingay, *The Agricultural Revolution 1750-1880*, 1966, p. 189, 190.

14) 渡辺 寛, 前掲書 88頁。

15) W. H. Long, *The Development of Mechanization in English Farming*, *The Agricultural History Review*, 1963, Vol. XI, Part I., p. 20.

蒸気耕耘機の台数について、1863年には600台と推定され、1866年には800—1000台と推定された。C. C. Spence, *God Speed the Plow — The Coming of Steam Cultivation to Great Britain*, 1960, p. 106.

16) Morton, op. cit., p. 57.

なお、最も普及度の高かった蒸気脱穀機について、具体的数字ではないが、次のような記述がある。

「1850年代初期にはまだ全地域で旧来の機具による全然機械化されていないものがみかけられた」が、「その後の20年間に蒸気機関による脱穀機がほとんどあらゆるところに浸透した。」J. H. Clapham, *An Economic History of Modern Britain, 1850-86*, 1932, p. 268.

11) 拙稿「一九世紀中葉英国農業における資本蓄積の特質」、九州大学教養部『社会科学論集』第14集、1974刊、187-9頁。()は今回補充した部分を示す。

蒸気機械はその利用がかなりふえたとはいえ、まだ一部に限られていたし、搾乳機とか刈取機等にいたってはほとんど利用されず、機械そのものの改良とともに普及するにいたるのは、一九世紀末ないし二〇世紀に入ってからであった(椎名重明)¹⁷⁾ といえよう。こうして「一九世紀中葉までに農業労働者は減少しつつあり、馬匹労働は経費が高いことから省力的機械の導入の契機が生まれた」(ロング)¹⁸⁾ もの、農業における労働需要の季節的繁閑を均すことで、基幹労働力を積極的に放逐するところまでは遠く及ばなかったようである。それだけでなく、場合によっては、「馬が索く播種機や耕耘機などのような広く使用されるようになりつつある機械類は条播栽培の面積を拡大し、築堤用犁のような他の工夫とも相まって、おそらくは労働需要を拡大したものと考えられる。(撒播に代えて条播にしたり、排水の便を良くしたりで、以前より良質で多量の収穫をもたらされたうえに、機械を効率的に使用するためには農場はより広くまたより整然とした形に整備されねばならなかった。垣を掘り返したり、堤と溝とを均したりする作業が必要になったし、荒地から新規に開拓された地方では婦女子の一団が雇い入れられて、石や草をどかしたり、機械耕耘のために耕地を整備したりしたからである。)」(チェインバーズ & ミンゲイ)¹⁹⁾ というようなことも生じた。そこで、モートンをして彼の報告で、……、「最近における機械類と蒸気力の格段の普及は、農業労働者にとって有害

な作用はしていない」と言わしめ、あるいは機械使用農場の方が労賃支払が単位面積あたりにしても大きい傾向があることを根拠にして「機械類は長い眼でみれば労働者の最良の味方である」²⁰⁾ と主張せしめる、そういう基盤になるような事実が少なからず存在しつづけることになる。(拙稿「一九世紀中葉 英国 農業における資本蓄積の特質——『賃銀、価格および利潤』中の一題材に関して」、九州大学教養部『社会科学論集』第14集、1974年187—9頁)。

旧稿中の文章を引用したのは、マルクスの『資本論』における農業機械論に対する疑問の表明として、不十分ながらも基本的には正しさを保持していると考えたからであるが、それに加えて、マルクスの農業機械論に対する疑問をより鮮明にしうる論点、一九世紀英国農業の具体的事情に即した論点を付加すべき土台として利用したいと考えたからである。

旧稿中で筆者は、農業機械の導入による農業労働需要の軽減傾向を認めつつも、その普及定着は『資本論』刊行時点まででみるとなお部分的・一時的であって、農業労働者の積極的放逐までには至らなかった、と一般的な面で叙述した。それが誤っているわけではないが、問題としてとりあげている事柄の性格をより正確に理解し、マルクスの農業機械論への疑問をより明確にするためには、特殊的な面に照明をあてる必要がある。いわば焦点を形成するともいえる論点として、ここで付加したいと考えるのは、英国農業における穀物刈取作業の問題である。第一には、英国農業労働で最繁忙な時期は穀物収穫期であり、労賃支払においても最大の比重を占めるのは収穫労働であるということ、第二

17) 椎名重明『近代的土地所有』東京大学出版会刊、1973年159-60頁。

18) Long, *op. cit.*, p. 22.

19) Chambers & Mingay, *op. cit.*, p. 189. 旧稿で drilling を「畝植栽培」としたのを「条播栽培」に、mole plough を「モグラ犁」としたのを「築堤用犁」にそれぞれかえた。

20) Morton, *op. cit.*, p. 58, 57.

には、穀物刈取作業こそが機械化の最も遅れた部分であって、『資本論』第1巻刊行後の1870年代においても英国農業の穀物刈取の過半は道具を用いた手労働に頼っていたこと——この二点が、追加したい具体的な論点である。

収穫過程の繁忙

コリンズ『1790—1870年の英国における収穫技術と労働供給』²¹⁾には、穀物収穫期の労働力不足について、次のような叙述がある。

「歴史的にみても、また現在についても、穀物収穫 (small grains harvest) は、例外的に大きな労働需要をひきおこすのであって、そのため、ただたんに地方の労働力の貯水池が空になってしまうだけでなく、さらに大抵のばあい多くの臨時的労働者の移入までが求められることになる。一七世紀の英国において、収穫労働力の地域間移動が、すでにいくつかの地方においてはかなりの労働不足を惹起しつつあった。一層大規模な労働移動が第一次大戦下のバルカン地方で生じたのを、レッドフォード (Redford『英国労働移動, 1800—1850年』の著者——福留) は目撃している。今日においても、労働移動は近東・地中海・南米の多くの農業にとって不可欠な存在である。」(E. J. T. Collins, *Harvest Technology and Labour Supply in Britain, 1790-1870*, *Economic History Review*, 2nd series, 22, November 1969, pp. 453-4)

21) E. J. T. Collins, *Harvest Technology and Labour Supply in Britain, 1790-1870*, *Economic History Review*, 2nd series, 22, November 1969, pp. 453-72. この論文には多くを負っており、以下この論文から多くを引用する。

加用信文『イギリス農業近代化における穀物刈取作業の問題』²²⁾には、穀物収穫期の作業の繁忙について、次のような叙述がある。

「イギリス農業において、8月は穀物の収穫月 (Harvest Month) であり、農民にとって欣びのときである反面、最も激しい労働を要する農繁期でもあった。つまり、西欧の一年一毛作的な風土では、冬穀 (秋播きの小麦・ライ麦) と夏穀 (春播きの大麦・燕麦) のいずれも収穫期が8月に重複するからである。とくに、中世の封建的な三圃農法および過渡的な輪換式 (穀草式) 農法を通じて、耕地における穀物連作的な作付方式では、冬穀と夏穀の収穫の重なる8月には村落または教区内の子供を含めたあらゆる労働力が動員されたのみでなく、都市の他産業の労働力をも必要としたのである。そのことは、イギリス中世の労働立法、すなわち14世紀に制定された『労働者規制法』(1349—51年)とそれに続く『職人条令』(1568年制定)によって、穀物収穫期には、手工業の職人も、その作業を一時中断してまで、収穫労働に従事すべきことが強制されていた事実からも、これを有力に立証する。」(加用信文『イギリス古農書考』, 1978年, 37頁)

収穫過程の地位

穀物収穫期の作業繁忙とそれによる労働需要とが、いまここで問題にしている時期 (穀物法廃止後約20年間) に、どの程度に達していたか。それを知る手掛りになる資料をあげてみたい。

22) 加用信文「イギリス農業近代化における穀物刈取作業の問題」, 『土地制度史学』第58号, 1973年, 1-23頁, 初出。加用信文『イギリス古農書考』御茶の水書房刊, 1978年, 37-87頁。この論文には多くを負っており、以下この論文から多くを引用する。

ケアド『1850—51年の英国農業』²³⁾に、西ノークの10農場を比較して得られた数字で、1000エーカーあたりの雇用労働者数平均(average number of labourers employed)を示す表が、収録されている。

Men able to do harvest work	28.1
Men of inferior ability	4.5
Lads above 16 Years	7.8
Boys under 16 Years	11
Women	6.25
Total	57.65

(James Caird, *English Agriculture in 1850-51*, 1852, p. 175)

これによると、雇用労働者の類別を収穫労働可能か否かで行なっていること、収穫労働可能な者がほぼ半分を占めていることが判る。これから収穫労働が農業生産労働のなかで非常に重要な、中枢的地位にあることが理解できよう。ただここで言う収穫作業可能な者が収穫以前の、耕起・播種・中耕などの作業に従事しないとは必ずしも言えないし、収穫物の運搬などがここで言う収穫に含まれるか否か明らかでない。またケアドも言う通り「農場での作業の一部分は請負契約(task work or contract)でなされていた」(p. 175)から恒常的な雇用労働だけでは農業生産労働の全体を把握できないことになる。したがって収穫労働の全農業労働に占める実際の比重は、ケアドの表記を単純に、57.65分の28.1と読みとったばかりよりは、相当小さくならざるをえないだろう。

モートン『農業で利用される諸力について』²⁴⁾

23) James Caird, *English Agriculture in 1850-51*, 1852.

24) J. C. Morton, On the Forces used in Agriculture, *Journal of the Society of Arts*, Dec. 9, 1859. pp. 53-61. 拙訳『農業において

(『技芸協会報』1859年12月9日号)には、多数の興味深い数字が記録されている。当面の穀物収穫労働の比重をみるためには、例えば、次のような数字がある。

「エヴェスハム近くのシャドブリィに住むランドゥール氏は、500エーカーの耕地と200エーカーの牧場を経営しており、多少の出入りはあるが、30名の男性、7名の女性、および12名の少年を1年間にわたって、また追加的に70名の男性を収穫期に3週間にわたって雇用している。つまり1年を通じて恒常的に42名を、あるいは耕地12エーカーと牧場5エーカーにつき1名ということになる。」(J. C. Morton, On the Forces used in Agriculture, *Journal of the Society of Arts*, Dec. 9, 1859. p. 56 拙訳 249頁)

「イースト・ローティアンの630エーカー全部が耕地という或る一流の農場では、男性で22名と、子供と婦人で35名が常時雇用されており、そのほかに25ないし30名の人々が収穫期に3週間から4週間雇用されている。」(p. 65 拙訳 250頁)。

モートンは、子供と婦人とは大略男性0.4人に匹敵ずるとして計算している。この前提に立って前者の年間総労働をみると、恒常的雇用者が38名で52週、臨時的雇用者が70名で3週、(すべて恒常的労働者とみなすと42名で52週)、合算して2184-6人・週。収穫期の労働は恒常的なもの38名で3週、臨時的なもの70名で3週、合計して324人・週。したがって収穫労働の比重は約7分の1になる。後者について同様の計算を試みると、1970人・週にたいして

用いられる諸力について」、九州大学教養部『社会科学論集』第14集、1974年、237-66頁。

Labour accounts for Monkton Farm, Tarrant Monkton,
Dorset, for the year 1875-6.

			£ s. d.
1875	February 22nd	4 weeks Pay	20. 1. 6.
	March 22nd	4 weeks Pay	20. 2. 10.
	April 19th	4 weeks Pay	21. 1. 7.
	May 17th	4 weeks Pay	22. 13. 8.
	June 14th	4 weeks Pay	23. 9. 8.
	July 12th	4 weeks Pay	27. 5. 2½
		(Hay Harvest)	
	August 1st	3 weeks Pay	24. 0. 0.
	—	—	—
	September 6th	Harvest Month	67. 15. 4.
	December 27th	4 weeks Pay	20. 18. 8.
1876	July 31st	3 weeks Pay	28. 6. 10.
		(Hay Harvest)	
		Harvest Labour	61. 10. 1¼

(Morgan, *op. cit.* p. 39)

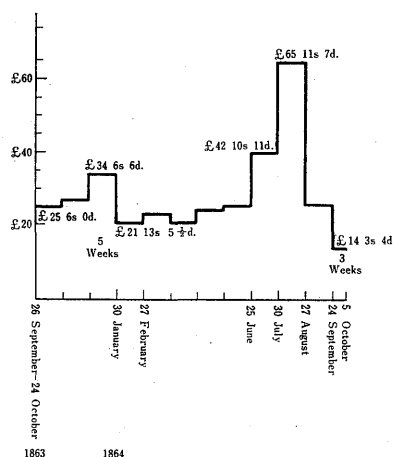
220人・週で、収穫労働の比重は約9分の1となる。ただし、これらは農繁期と農閑期の差を一切無視して年間の各週の労働を等量とみなす前提に立っての計算であるから、収穫労働の全農業労働に占める実際の比重は、上記の約9分の1ないし約7分の1という水準よりは、遙かに高まることは言うまでもない。

ロンドンからオックスフォードに通ずる鉄道線にレディングがある。このレディング大学農業史研究所及英国農村生活博物館 (Institute of Agricultural History and Museum of English Rural Life, The University of Reading) に蒐集された農場経営記録に基づく研究によって、上記のケアド、モートンの数字よりも精密な数値を知ることができる。

モーガン『一九世紀農村生活における収穫機具の地位』²⁵⁾ は、農場経営記録の分析によって得たグロセスターシャの農場の1863—64年の労

賃支払、ドーセットシャの農場の1875—76年の労賃支払の様子を、次のように図表化した。

Account for labour 26 September 1863-5
October 1864, Joseph Martin, Ripple,
Tewkesbury, Glos.



Total labour bill = £379 0s 10d.
(Morgan, *op. cit.* p. 40)

上の図に基づく、1863年9月26日—1864年10月5日の労賃支払総額は379ポンド10ペンスであり、そのうち7月30日—8月27日の収穫期4週間の労賃支払額は65ポンド10シリング7ペンスである。したがって賃銀額からみた収穫労働の全農業生産労働に占める比重は、

25) David H. Morgan, *The Place of Harvesters in nineteenth century village life. Part 2, in Village Life and Labour*, eds. Raphael Samuel, 1975.

約6分の1ということが出来る。

上の表に基づいて、1875年2月22日—12月27日の労賃支払額を計算すると255ポンド6シリング11½ペンスとなる。1月分と2月分、10月分と11月分とが欠けているが、前掲図と相似性が高い所から図示された1月分2月分10月分11月分の労賃支払額を表示に欠けた労賃支払額とみなすと、1875年の支払総額は355ポンド前後と考えられる。収穫月の労賃支払額は67ポンド15シリング4ペンスであるから、その年間総額に対する割合は約5分の1といえる。

こうして、収穫時期の繁忙と労働需要の程度は年間総量に対して6分の1ないし5分の1の割合になるとみて良い。それは、先に示唆した通り、ケアドの数値よりは相当低く、モートンの数値よりはかなり高い、と言えるものである。

収穫機具の原点

英国農業の労働過程において収穫作業が中核的位置を占めていることを確認しえたと考えるので、次には、収穫作業に使用される農機具とその普及定着の歩みについて見ることにしたい。

コリンズ論文は、フィッツハーバートの農書(Fitzherbert's Book of Husbandry)やタッソーの『改良農業五百策』(Thomas Tusser, *Five Hundred Pointers of Good Husbandrie*)等の参看を求めつつ、18世紀末の穀物刈取について次のような概観を示している。

「1790年における収穫技術の国民的水準は、基本的に一六世紀までに達成されたものと変わらなかった。小麦は、ほとんどの地域で、鋸歯の

ある小鎌(the toothed sickle)か、あるいはもっと頻りに鋸歯のない小鎌(the smooth reap-hook)かを使って、手刈りされていた(hand reaped)。地上1フィートあたりを刈って長い切株(stubble)を残すようにする高刈(reaping high)は、南部イングランドおよび東部イングランドの通常的方式であり、特に重い土質の場合には専らこの方式が行なわれていた。それに対して、他の地域では、地面に近いところを刈る根刈(reaping low)がほとんど支配的だった。大麦・燕麦は、チェスターとヨークを結ぶ線より南の南部ブリテンでは一般に大鎌(scythe)で刈取られた(mowed)が、北部ブリテンやアイルランドでは小鎌で刈られ(reaped)、大鎌は草刈りや飼料用作物にだけ用いられた。大半の穀物は完熟してから刈取られるのが普通で、早刈りはミドルセックスやウィルトシャなどごくわずかの地域にみられただけだった。こうした状態に変化の兆しがみられたのは、一八世紀半ばに至ってからである。その頃、重い鎌(the heavy hook)を使って刈り倒す方式(the practice of "bagging")がロンドン地方やデボンやイングランド辺境地方で手刈りにとって代り始めた。また鋸歯のない小鎌(the smooth reap-hook)が、鋸歯のある小鎌(the serrated sickle)を駆逐し始めていた。さらにまた、イースト・ライディングでは、大鎌(the scythe)が小麦刈取用具として使われたりした。とはいえ、1790年までは、これらの技術革新の影響は、南部イングランドのごくわずかの地方に限られていたのである。南部イングランドではすでに中世に確立していた穀物用大鎌(the corn scythe)が、この時期に至ってもなおハンバー河より北へ侵透することはできなかったの

ある。」(p. 456)

加用信文論文には、「イギリス農業の父と呼ばれる Fitzherbert の農書 *The Boke of Husbandrye*, 1534」, 「Fitzherbert の農書から約 20 年後に刊行された Thomas Tusser, *A Hundredth Good Pointes of Husbandrie*, 1557—後で *Five Hundredth Points of Good Husbandry*, 1573 と改題して刊行」をはじめ多くの古農書を通じて確認される「前近代的農法における穀物刈取作業」について、次のような叙述がある。コリンズ論文の叙述に比べて単純化の傾きはあるが、他面明確に類型化されて判り易いという利点をもつので、あわせてみておく。

「小麦・ライ麦の冬穀の刈取に reap (またはイングランド北部諸州の用語としては shear), 大麦・燕麦の夏穀の刈取には mow という用語上の区別がなされている。一般に、この reap とは、半月状の小鎌である sickle による高刈を意味し、mow とは大鎌の scythe による根刈——それは本来採草地 (meadow) における干草用の刈取に用いられる——を意味している。すなわち、小麦で代表される冬穀と大麦で代表される夏穀との間に、刈取用具と刈取方法に関連して、小麦—半月鎌 (sickle)—高刈 (reap) と、大麦—大鎌 (scythe)—根刈 (mow) の対置が看取される。なお冬穀の高刈のあとの高い刈株 (haulm) を根元から刈取るのは、大鎌による根刈 (mow) であるから、正確には冬穀では両者が前後して行われたといえる。」(前掲書, 56 頁)²⁶⁾。

26) 加用信文論文には、小麦について小鎌による高刈の有利性を説明している所がある。その要点を挙げると次の通り。

コリンズ論文と加用信文論文の間に多少の差異はあるが、しかし、産業革命に入る頃小麦刈取は主として小鎌 (sickle or reap-hook) を用いてなされていたこと、大鎌 (scythe) が使われるのは大麦・燕麦のばあい、それも穀作地帯についてであること、はほぼ両者に共通する認識と考えられる。

(1) 高刈は、立毛の穀物間に発生している雑草が刈取って結束した刈束 (sheaf) の中に混入するのを避けるための方法である。大麦・燕麦などは飼料として用いられるために根刈によって混入する雑草は粗飼料の増大を意味するのである。

(2) 高刈は、撒播されている立毛を集めて左手でそれを握って刈取ると同時に、穂先を揃えて直ちに結束 (bind) するか、または地上に一束 (sheaf) ずつの分を置いて、それを刈取人 (reaper) の後に続く結束人 (binder) が結束していく方法がとられるが、いずれもパン用穀物に対し落穂や脱粒を可及的に防ぐ方法である。

(3) 小鎌使用は、大鎌使用が男子に限られた重労働であるのに対して、はるかに軽作業で、女子でも可能だった。むしろ小麦の刈取人には女性労働が、その結束人には男性労働が結びつくという組合せがみられた。

(4) 小鎌による高刈は、大鎌による根刈に比べて、刈取能率そのものは低い。ただし、大鎌による根刈でも、刈倒した藁稈を結束する方式では、散乱した藁稈を集めて結束するのに手数を要し、かつその束は穂が揃わず粗雑である。また結束せずに刈倒したままの状態 (swath) で地乾してそれを車に積込んで運搬する方式では、その積込・運搬に小鎌による高刈より手数がかかり、かつ高刈した藁稈より容量が嵩むためその積込・運搬労働は一層大となる。小鎌と大鎌を、刈取作業だけでなく、結束・集束・積込・運搬の作業まで含めて考えると、小鎌による刈取は、必ずしも非労働節約的とは言えない。特に風雨その他の事情で穀物が倒伏した場合には、小鎌を使用するほかない。

(5) 宅地内に搬入した穀物は納屋 (barn) に収めて積込んでおき、冬季の農閑期にからざお (flail) で打穀するが、高刈した刈束は根刈のそれに比べて容積が小さいから、それだけ納屋の空間を節約しうる。

(6) 逆に小麦の大鎌による根刈を妨げる要因として、大鎌で穀物を薙ぎ倒すには地面が平坦でなければならない。秋播の小麦にとって冬季の湿潤はその発育上の障害をなし、うどんこ病などの病害を誘発するので、排水溝 (open drain) の機能をもつ畦間 (furrows) が作られ、畦 (ridges) の上に冬穀が播種された。(前掲書, 49-54 頁)

収穫機具の発展

このような状態から、1870年頃までに小麦についても小鎌による手刈 (Hand reaping) に代わって、Bagging, Mowing が実施されるようになり、それらが収穫機械と並存するという状態にまで変化がみられること、それがコリンズ論文の最大の強調点だと考えられる²⁷⁾。

そこでは、まず論文の課題に関して、次のような叙述が展開される。

「犁耕や収穫 (ploughing and harvesting) のような農作業で一人あたりの仕事量を改善するということになると、今日ではすぐさま機械の導入が念頭に浮かぶことになる。しか

27) 18世紀末から19世紀70年代にかけてみられた Hand reaping, Bagging, Mowing について、コリンズ論文に依って、まとめてみる。

Hand reaping; 刃に鋸歯のある小鎌 (serrated edged sickle) か、多少重くて幅広の、刃に鋸歯のない小鎌 (smooth edged reaping hook)—8—15オンスの重量、15—24インチの刃渡り一かを使う。刈取人 (reaper) は、膝をついた姿勢か前屈した姿勢で、手で藁稈を把んで、鋸で挽くように手前に引く動作で刈取る。刈取ったものを用意されている藁縄 (straw band) のうえに置き、刈束 (sheaf) になるまで積む。

Bagging; 大きくて重い鋸歯のない中鎌 (smooth edged hook)—2—4ポンドの重量、20—30インチの刃渡り一を使う。刈取人 (bagger) は、他方の手で棒か別の中鎌か小さい熊手を使って立毛を揃えて押えておき、中鎌で低い所を薙ぎ払うようにして刈り倒す。刈取人自身が集束と結束 (gathering and binding) を行なうこともあるが、通常は刈取人1人に対して2人ずつ従っている後続者 (followers) にまかされる。

Mowing; 大鎌 (scythe) を使う、普通は、環状になった木の枝や針金—bow と呼ばれる—ないし木製のフォーク状の枠—cradle と呼ばれる—が取付けてあって、刈った穀物をむらなく倒せるようにしてある。集束と結束は、別の人間の仕事である。(Collins, op. cit. p. 456)

E. J. T. Collins, *Labour Supply and Demand in European Agriculture, 1800—1880*, in E. L. Jones and S. J. Woolf, eds. *Agrarian Change in Economic Development, the Historical Problems*, 1969, には、Hand-reaping, Bagging, Mowing の写真, sickle, hook, scythe の絵図が収録されている。

し、歴史をふりかえってみると、農業経済の発展が機械やその他の高額な技術の採用と密接に関連していたとは必ずしも言えない。英国や日本で農業生産の上昇に最も効果のあったのは安価な生物学的改良の漸次的普及であった。1870年まで根菜類やマメ類が英国の大半の地域で高収益農業 (high-output farming) の基盤を成していたし、ほとんどの農作業は当時でもなお労働集約的道具を用いた方式 (labour-intensive hand-tool methods) に依っていた」(p. 453)。ところが、「アメリカ型の収穫機械 (American type reaping machines) が登場する一九世紀の第三・四半紀に至るまで、英国の収穫技術には何ら意義ある発展はみられなかったという風に考えるのが、慣例になってしまっている」(p. 454)。そこで、「本論文では、第一に、1790年から1870年までの間に英国において人力収穫技術 (hand-harvesting technology) の重要な進歩発展が生じているし、その進歩発展は大部分改良を重ねた道具方式という中間的技術 (intermediate technology of improved hand-tool methods) を支えとして成就されたものである、という反論を提起したいと思う」(p. 455)。

そして、上の課題に対する結論として、次のような叙述が与えられる。「この間に生ずることとなった人力収穫技術における革命の主要側面は、次のようなものである。第一のそして最も重要な側面は、低い作業能力の道具から高い作業能力のそれへの転換である。第二の側面は、道具の意匠および構造の改善であり、第三の側面は、穀物収穫時期の早期化である。これらの方式の変化は次のように要約される。南部英国では、mowing or bagging が hand reaping に取って代って、小麦刈取の標準的操

作となった。それと同時に、中間的方策として、広汎な地域で、根刈 (low reaping) が高刈 (high reaping) に取って代り、鋸歯付きの小鎌 (serrated sickle) は鋸歯なしの小鎌 (smooth reap-hook) に道を譲ることとなった」(pp. 546-7)。

「1835—70年が、この革命の最活況期、“大量採用 (majority adoption)” 局面とでもいふべき時期であった。1835年頃から、突如として大型道具に対する世間の関心が再発した。1840年代中頃までに、広汎な現場で急速な変化の知らせが飛びかった。1850年代後期からは、時を経て尊いとされてきた習慣などを廃止したと報告できるということが、誇らしいこととされるようになった。例えば、小鎌 (sickle) は廃物と化したので“大英博物館に陳列したらよかろう”などと書かれたほどだ。1870年代までに南部英国の広い地域で小鎌は使用されなくなり、わずかに小経営と“公共用地と小分割地” (smallholdings and “common yard and allotments”) に残されているだけになった。革命のこの局面で最も重要なことという、1850年から1860年代中頃までに、中鎌と大鎌 (bagging-hook and scythe) が、収穫機械 (reaping machine) に比べてたとえより急速にはないとしても、同じ程度に急速に普及定着したことである。1870年代初めまで、英国の多くの地方では、大規模な機械化は開始されていなかったのである」(pp. 457-8)

ふたつの仮定——ひとつには、1790年と1870年の間に穀物作付面積と地域構成・品目構成に大きな変化がないとする仮定、ふたつには小鎌から収穫機械へ直接変化したのは穀物作付面積の10%以下しかないとする仮定——を置けば、1790—1870年に新式人力収穫技術を導入した

面積は500万エーカー以上に達すると計算される (p. 458-9)。「1790年には小麦の90%、燕麦の75%、大麦の25%が小鎌で刈取られていた。1870年までに各割合は20%、40%、10%に低下した。技術変化の潮流の実際は、これらの数値から想像される以上に遥かに大きかった。1850年代までに南部イングランド、スコットランド、北部アイルランドの大部分で reap-hook が sickle に取って代った。同時にほとんど大部分の農場で、一つだけでなく三つ以上の道具に関連する進展、sickle→reap-hook→scythe、あるいは sickle→reap-hook→bagging-hook がみられた」(p. 459)²⁸⁾。

他方、新式人力収穫技術と比較すべき収穫機械の位置づけについては、コリンズ論文には、前出の「1870年代初めまで英国の多くの地方では大規模な機械化は開始されていなかった」(p. 458) という言及以上に詳細な叙述は

28) 加用信文論文では19世紀の穀物刈取について、次のように述べられている。「穀物の生産過程においても、plough 体系を基軸とする畜力機械化の進展とともに、穀物の脱穀・調整過程においても、からざお (flail) に代って脱穀機 (threshing machine) の考案、選別機 (winnowing machine) の改良などは、すでに18世紀前期にはじまり、18世紀末期には広く実用化段階に入り、その面の労働節約はいちじるしい効果を挙げたが、最も重労働的で農繁期を形成する穀物刈取作業のみは依然人力作業として取り残され、しかも同じ人力刈取でも、より刈取能率の高い scythe による sickle の交替すら、小麦刈取において実現されなかったのである。……1831年アメリカにおける McCormick 考案の reaper が試作・改良を経て実用化されるに至ったのは1860年代である。それがイギリスに導入されて普及するようになったのは、すでにイギリス農業革命が終結したとみられる19世紀後期に入ってからである。しかも、機械力による reaper と binder の出現までは、従来の sickle による小麦の手刈を全面的に一掃しえなかったのである。」(前掲書178頁)。19世紀中葉においても hook や scythe の小麦への適応がみられないとする点でコリンズ論文と異なるが、その他の点では本文でふれた諸論と軌を一にしていると考えられる。

ない。その点をモーガン『一九世紀農村生活における収穫機具の地位』で補充すると、当時の資料に基づく次のような叙述がある。「英国農業における収穫作業についてみると、機械の援用はなかなか受け入れられず、世紀の終り間際まで人力道具が広汎に使用されていた。収穫機械の普及 (general use) は 1870 年代になって始まるのだが、世紀の交代期においてもなお決して一般的存在ではなかった (by no means universal)。多くの小さな農場で納屋の壁の釘や小屋の隅に収穫道具が備えられていたのである」(p. 61)²⁹⁾。

またディヴィッド『農地景観と機械：ヴィクトリア期英国における技術関係と土地保有と穀物収穫の機械化』³⁰⁾によると、「1863年までにグレート・ブリテンの小麦、燕麦、ライ麦、大麦の作付面積のうち収穫機械で刈取られるのは、6%以下と推定される。合衆国での収穫機械使用面積は南北戦争前夜で15%をこえており、1870年までには78%に達した。それに対して英国の穀物収穫は1874年でもおそらく53%以上が収穫道具 (the sickle and the scythe) に依っていた」(Paul. A. David, *The landscape and the machine: technical interrelatedness, land tenure and the mechanization of the corn harvest in Victorian Britain, in Technical choice innovation and economic growth*, 1975. p. 236)。

29) Morgan, *op. cit.*, p. 61.

30) Paul A. David, *The landscape and the machine: technical interrelatedness, land tenure and the mechanization of the corn harvest in Victorian Britain, in Technical choice innovation and economic growth*, 1975. pp. 233-288.

収穫労働の流出

以上によって、1870年以前において英国農業の収穫作業が、収穫機械によってなされる事例は少数にとどまっていたこと、なお収穫道具を使つての作業が主流であったが、そのなかで小鎌から中鎌ないし大鎌へ重点が移行していたこと、を知りえた。そこで、次にそのような変化を招来した要因について見ることにしたい。

コリンズ論文の強調点の第二は、この要因に関わっている。前出の強調点の第一に続けて、言う。「第二に、この人力収穫技術の進歩発展は、基本的には収穫労働市場の条件悪化への対応として生じたものである」(p. 455)。

「作業遂行の完全性という観点からは、小鎌が、中鎌なり大鎌なりよりも多能多才できまこまかい作業ができる点で優れているというのが、1860年代までの実践的農業者たちの共通認識だった」(p. 462)。ひとつには、中鎌・大鎌のばあい、脱粒率が高いという不利がある。とくに倒伏していたり過熟しているときにこの不利は顕著である。ふたつには、物理的条件が関係する。地表が均一でなかったり、畦が際立っていたり、岩石や切株があったりすると、よほど熟練した刈取人でない限り、大鎌は使えないということになる。また密生していたり、倒伏しているときも大鎌は使いにくい。三つめは、理性にでなく感情に関係することであるが、パン用穀物を粗野な方法で刈り取ることには伝統的に抵抗が強かった。こういう事情に支えられて、小鎌使用への執念には根強いものがあつた (p. 462)。

だが、そのような根強い小鎌の残存力も、前述のように中鎌ないし大鎌によって崩されていたのである。「結局において bagging and mowing が hand reaping に取って代つた

Work Rates and Labour Requirements for Competing Harvest Methods in Britain

A=Cutting rate per worker-day(in acres)
 B=Ratio linkage workers to cutters
 C=Worker days per acre

	Wheat			Barley and Oats		
	A	B	C	A	B	C
High reaping (sickle)*	0.35	1: 7	3.6	—	—	—
Low reaping (sickle)	0.25	1: 5	4.8	0.33	1: 5	4.0
Low reaping (reap hook)	0.33	1: 5	4.0	0.4	1: 5	3.3
Bagging	1.0	2: 1	3.0	1.3	2: 1	2.2
Mowing (binding and sheaving)	1.1	2: 1	2.7	2.0	2: 1	1.5
Mowing (leaving loose in swathe)	—	—	—	2.0	5: 1	0.76

* Excludes autumn clearance of stubble.

(Collins, *op. cit.*, p. 460)

ということは、農業者たちが、穀物の脱粒を防ぐことや技術的な完全性ということ以上に、労働節約を重視するようになった事を意味しているにちがいない」(p. 463)。ひとつには、1830年代と1860年代とを比較してみると収穫労賃が穀物価格より急速に上昇したために、労働集約的な穀粒減耗阻止的な方法では利潤が確保できなくなったということがある。ミッチェルとディーンの共著『英国歴史統計』によると、1830—9年平均と1860—9年平均とでは、小麦価格8%低落、大麦価格11%高騰、燕麦6%高騰に対して平均週賃銀はイングランドで17%高騰、スコットランドで57%高騰という状況であった。収穫時期の賃銀は通常より需要が錯綜するため高いのであるが、その上昇速度も年間平均のそれより大きく1840年代の終り頃と1850年代の終り頃の間でさえ30%近くの上昇の記録がある。ふたつには、1830年代末から穀物の面積あたり収量が急速に増大した——1835年と1870年の間で小麦20—25%、大麦10%、燕麦15%の上昇率——ので、収穫道具を中鎌・大鎌に代えることによって脱粒が増しても深刻な痛手ではなくなったということがある。三つめに、牧畜農業の比重が増大し、したがって穀物

の国民経済のなかでの重要性が減少したために、この面での技術革新に対する経済外的な制約が稀薄化したことがある。従来農村住民の間では収穫作業は聖なる儀式、変更不可能な儀式とされ、小鎌はその象徴であった。都市住民が増大し、農村でも牧畜農業のように商業的色彩のより濃いものが強まるとともに、上のような穀物およびその収穫作業を神聖視する空気がゆるんだのであろう。(pp. 463—4, 466)。

このような状況下では、表示のように、刈取・集束・結束・乾燥まで含めた一連の労働過程で、mowingがbaggingより多少経費節減になり、low-reapingより20—25%経費節減、high-reapingより25—30%経費節減になるというのは、大きな意味をもってくる。

穀物収穫に関する労働需要は、1835年と1870年の間に20—25%増大したと考えられる。穀物作付面積が1835—55年に多少増大し、1855年以降多少減少した。したがって、余り大きな増減はないとみてよい。他方、面積あたり収量は、前出のように小麦20—25%、大麦10%、燕麦15%の増大であるから。(p. 466)

穀物収穫に関する労働供給は、この間に大いに減退した。第一に、収穫労働者の50—60%

を占める恒常的農業労働者 (full-time workers in agriculture) は1831—51年に約17%増大した後、1851—71年に15—20%減少した。1831—1871年でみると大幅な増減はないが、1850年代以降の減少は大きい。「恒常的労働者が全体の収穫労働者の半分を占めるとして、7—10%の減少となるが、しかしこれだけであれば技術革新によって吸収可能だろう」(p. 469)。したがって、第二に、臨時的・一時的収穫労働者 (casual and temporary harvest workers) のより急速な、そしてより根本的な減少が、決定的に響いたと考えられる。都市の雇用機会が増大し、農村賃銀との格差が開いたために、従来は収穫労働の供給源だった非農業労働者およびその家族に期待することができなくなったのである。手工業が機械制大工業に敗退して、手工業従事者が工場労働者に転化したことも、この傾向を強めた。それだけでなく、従来いまひとつの収穫労働供給源だったウェルズやアイルランドからの移動労働者が、いまや高賃銀で就労日数の長い鉱山・建築・機械などの分野に流入し、農業にはふりむかなくなったのである。

収穫機械の遅延

このような労働力不足の進行にもかかわらず収穫機械の導入がはかばかしくなかった理由については、コリンズ論文は触れていない。

ここでは、オーウィンとウェタムの共著『英国農業史 1846—1914年』からその点に触れた叙述を補充しておきたい。

「1846—1851年」に関する部分より。「多くの機具が利用可能であり、また完成への努力も

傾けられていたのに、多くの農業者は父祖伝来の旧式の道具を愛好していた。新式の機具は金額がかさみ、しかも鉄製の枠は壊れやすかった。定置されていない可動部分はすぐ駄目になってしまい、鍛冶屋が修理してもうまく行かないことが多かった」(pp. 9-10)。

「1851—1875年」に関する部分より。「機械を使って穀物を刈取るには、大層込み入った操作が必要であった。……1850年代、1860年代に用いられた機械で最も単純で安価だったのは、ハッシイ (Hussey) によって改良されたものだった。右側についている刈取刃で刈取り、刈取られた穀物は後方の低い台上に送り出される、そういう鉄製の枠組を2頭の馬で引くのである。台上に送り出された穀物は、別の人間によって熊手でかき落される。立っている穀物を刈取刃にきちんと押し当てるような装置がないので、穀物が曲っていたり湿っていたりすると機械はうまく働かない。穀物の出来が良いときには、熊手を使う人も馬も適切な速度で刈取刃を作動させるため大変苦勞する。また、馬が次の回の刈取作業のためひき帰してくる前に、刈取った穀物を結束して、邪魔にならないように運び出すのに、沢山の労働者が入用である」(pp. 111-2)。

「1875—1885年」に関する部分より。「この時期の最も重要な技術革新は、自動結束収穫機 (self binding reaper) だろう。刈取った穀物は乾燥のために束にして、その束を何組か組合わせて立てるのだが、この結束の仕事はおそろしく労働を喰う。それが、ついに機械化されたのである。アメリカ製の針金を使った結束機 (sheaf binders using wire) は、1877年にフィラデルフィア大陸博覧会に出品された。5年後マコーミックの紐を使った結束機 (Mc-

31) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *History of British Agriculture 1846-1914*, 1964.

Cormick's string binder) がダービーで開かれた王立農業協会の展覧会で金賞を得た。1884年までにシュルーズベリーでの展覧会の審査委員は次のように報告書に書けることになった。イギリス製の結束機が『私がこれまで見たことのある刈取および結束のためのどんな機具よりも、優れた刈取および結束の能力を発揮している。』1886年までに、穀作農業者は、臨時的な労働者の助けをかりることなく常雇の労働者の力だけで、刈取り、結束し、乾燥のために組合わせて立て、そして運び込む (cut, bind, stook and cart) ことができるようになった。尤も、学校の休みのときに男の子を補助に使うことはあったし、馬には少し負担がかかってかわいそうだったけど」(p. 254)。

以上から判断するとき、1860年代までは、収穫機はなお低効率で、労働節約の効果は金額のわりには目覚ましいものではなかったと考えられる。それが道具と区別される機械としての省力効果を発揮するのは、自動結束装置の考案以後のことに属するのだろう³²⁾。

32) オーウィン、ウエタム『英国農業史 1846—1914年』には、次のような叙述もある。「1869年の王立農業協会のマンチェスターでの展覧会までには、大穀作農場のほとんどでは穀物や干草の刈取を機械で行なった。そして最早“たちの悪い刈取人連中の横柄でわがままな態度をがまんしないで済むことになった。” そのころウォーセスターシャでは、“刈取人が少なくなって、1エーカーあたり5シリングを要求したうえ、馬車で畑まで送り迎えするように言うまでになった。”と報告された。そういうことが実際にあったのは、この季節の仕事に欠かせない熟練した刈取人の場合だけであったが、それでも機械による収穫ができるようになって、農業者たちは自分の常雇の労働者だけで仕事ができるようになり大助りだった。あとは、従来通り、結束用のなわを作ったり、結束したり、乾燥のためいく束か組合わせたり、干草を積み上げたり、そういうことをする女子供さえいれば良いというわけである。ジェイコブ・ウィルソン (Jacob Wilson) は北部イングランドでの自らの体験から、1860年代に利用できた機械

以上のような農業史家の見解を、マルクスの見解と照合してみると、1860年代までに農業機械が大量に導入されて、積極的に相対的過剰人口を形成したとするマルクスの議論は、1840年代から1860年代にかけての英国農業の現実の基本的流れと少なからず齟齬をきたしているのではないかという筆者の疑問は、深まらざるをえない。農業機械の中軸をなす収穫機導入はなお部分的であり、農業者は積極的に農業労働者を駆逐するどころでなく離農する農業労働者の動きに対応するのに四苦八苦していた、というのが、この時期の英国農業の現実の基本的流れだったのではないだろうか。

(三) ピュージの叙述を巡って

一九世紀中葉の英国農業に関して機械導入とその効果という観点からなされたマルクスの叙述において、現実の基本的流れが逸せられ、部分的事実しか把握されていないとすれば、その原因はどこに求められるべきだろうか。

理論的偏りについて

理論的観点からいえば、ここでとりあげたマ

によって穀物収穫の費用を30—40%節減できたと言っている。だが、それは、排水や地均しを徹底し、溝や畦をこわし、石をどかし、ローラーをしばしば動かして、農地を十分に整備して、はじめて実現可能なことだった。多くの小農場では、こういう条件を満たさないために、19世紀半ばからの20年間は、穀物刈取のときは scythesmen に、干草刈取のときは mower に頼らざるをえなかった。機械が十分に安くなり、故障しなくなり、効率よくなって、はじめて人力刈取が不要になるのであった。」Orwin & Whetham, p. 113-4. これで見ると、マルクスの叙述にある機械技術導入による過剰人口形成という動きが、1860年代において大農場においてみられたということになる。

ルクスの叙述の第一例および第三例の前半部分が属している『資本論』第1巻第7篇「資本の蓄積過程」第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」の論理構成が強く影響していると考えられる³³⁾。

この第23章は、第1節「資本構成の不変な場合に蓄積に伴う労働力需要の増加」、第2節「蓄積とそれに伴う集積との進行途上での変資本の相対的減少」という順序で展開されている。資本の蓄積が、生産力水準ないしそれを反映する資本の有機構成（生産手段に投下される不変資本に対する労働力購入にあてられる可変資本の割合）についてみると、好況期にはそれが不変のままの横への拡大という形をとり、不況期には、その上昇ないし高度化に伴う縦への深化という形をとって時間的に分断して現われ、前者では資本量の増加に比例して可変資本量が増加し、したがって労働力需要の増加、ひいては労働力供給の不足が生じ、後者では技術革新・新生産方法の採用が行なわれ不変資本に比べて可変資本の割合が小さくなり、したがって労働力需要の相対的ないし絶対的減少が惹起される。労働力需要の絶対的減少のばあい、相対的過剰人口または産業予備軍が形成される。第23章第1節および第2節の展開は、資本蓄積とそれに伴う資本主義社会に独自の人口法則に照応している。

だが、他面では、第23章の具体的叙述には底流として一つの強い偏りが認められる。例えば、第3節の冒頭で、第1節第2節の叙述を総括して、次のように言う。「資本の蓄積は最初

はただ資本の量的拡大として現われたのであるが、それが、いま見てきたように、資本の構成の[・][・]不断の質的变化を伴って、すなわち資本の可変成分を犠牲としての不変成分の[・][・]不断の増大を伴って、行なわれるようになるのである」³⁴⁾（傍点は福留）。つまり、資本構成の高度化、それによる生産性の上昇が「不断」に進行するかのようによ説かれる傾向がある。第3節の表題が「相対的過剰人口または産業予備軍の[・][・]累進的生産」(傍点は福留)となっているのも、同じ傾向の表われであろう。生産力上昇のための生産方法の改善は、何らかの形で既存の固定資本の価値破壊を伴うから、資本がそれを「不断」に進めることはできないはずである。相対的過剰人口または産業予備軍も「累進」的には形成されないはずである。既存の固定資本を前提として資本構成の不変のままの蓄積が限界に達してはじめて資本構成の高度化が図られ、相対的過剰人口の生産が策されるはずである。しかし、そのような点への配慮が十分になされないままに、資本構成の「不断」の高度化、相対的過剰人口の「累進」的生産が強調されていることは、動かしえない事実である。

このような相対的過剰人口の累進的生産を強調する理論的枠組を以て現実をみると、特定の歴史的段階に属する現実の全体像は主要関心事とならず、自己の強調する理論的枠組に適合するような現実の一面のみが関心の網にかかるということになるのではなからうか。

ここで検討している事柄に即していえば、相対的過剰人口の形成という問題が、英国経済全体の規模で、あるいは英国農業全体の規模で考察される面よりは、機械化・省力化に成功した

33) 『資本論』第1巻第7篇第23章における蓄積論については、戸原四郎「『資本論』と修正主義論争——蓄積論を中心として」、東京大学経済学会『経済学論集』第33巻第3号、1967年、58-73頁参照。以下の叙述もそれに多くを負っている。

34) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 657. 邦訳 819頁。

企業の事例、農場の事例に密着して考察される面が、強く前面に出ることになるのではなからうか。

前述のように、穀物法廃止後『資本論』執筆時までの英国農業の現実の基本的流れは、労働過程の中核をなす収穫作業において機械技術導入はなお部分的なものに留り、全体としては相対的過剰人口を形成しようとする生産力水準の引上げを実現しえず、むしろ都市・工業への人口流出によって労働力供給不足という事態に直面していた、というようなものであった。それに対して、マルクスの叙述は機械技術導入とそれによる過剰人口形成を強調するものであって、英国農業の現実の基本的流れとは必ずしも合致しないのである。ただし、英国農業の現実のなかには、機械技術導入によって労働力需要を減少しえた農業経営も部分的には存在していたであろう。その点を考慮すると、マルクスの叙述は、そういう現実の一面を把えて、それを全面化する所に成立している、と言える。

相対的過剰人口の累進的生産を強調する理論的枠組が、マルクスの現実を見る眼に、そのような一面化の傾きをもたらした、と考えられるわけである。

「ピュージ氏」について

現実の全般をではなく一面を把えるに終るというマルクスの傾向は、現実のひとつの反映としての資料の読み方にも影響を及ぼすことになる。

機械導入とその効果という観点からなされたマルクスの叙述第一例中の、「王立農業協会长ピュージ氏は、新たに採用された機械によって（相対的な）経営費がほとんど半減されたということを断言している」という文章をとりあげ

てみよう。

ピュージの名前は明記されているが、彼の言明がどこでなされたものか、出典についてマルクスは何も記録を残していない。

「ピュージ氏」(Herr Pusey)を追跡することから始める以外にない。オーウィンとウェタムの共著『英国農業史 1846—1914年』は、「フィリップ・ピュージ」(Philip Pusey)という項目を設け、ピュージの人となりについて、次のような説明を加えている³⁵⁾。

「この時期には農業改良の指導者として有名な人が何人かいたが、なかでも最も傑出していたのは、フィリップ・ピュージである。彼は、大財産家でも大地主でもなく、パークシャに5,000エーカーの小地所を所有していたにすぎない (the owner of a small estate of 5,000 acres in Berkshire)。1799年の生まれで、1830年に地所を相続し、1833年から1852年まで議会で議席を有していた。ロバート・ピール卿 (Sir Robert Peel) の党派につき従った。彼は、大層多能多才の人で、教養に富み文学好きで、ロンドン図書館の設立者の一人だった。また大変な実践家で、科学のあらゆる分野に関心を示していた。彼は、王立イングランド農業協会 (the Royal Agricultural Society of England) の設立委員であり、協会が“科学による実践” (‘Practice with Science’) という標語を掲げるに至ったのは、彼の提唱に依るものだった。彼は、設立当初から協会の会報委員会の議長を務め、実質上その編集者として、定期的に執筆したり、資料収集にあたりたりした。彼は、農業の繁栄のためには最新の科学的知識を応用すべきだと確

35) Orwin & Whetham, *History of British Agriculture 1846-1914*, 1964, pp. 51-2.

信しており、科学の素養のある人材を育成しようと努め、科学者と土地貴族との間を隔てている社会的障壁を突き崩すのに力を尽した。彼は、土地排水に関する権威者ジョサイア・パークス (Josiah Parkes)、ドイツ人大化学者リービヒ (Liebig)、植物学者ドーブニ博士 (Dr. Daubeny)、その他の著名な人々を招き、それらの人々と合宿したり、地方の地主や農業者を相手に講演や討議を試みたりした。また、彼は、自分自身の農場で実験を試みるのを喜んだ。彼は、新しい機械に大いに興味を示し、大博覧会の農業機械部門 (the agricultural implements section of the Great Exhibition) の責任者となった。ケアド (Caird) は、その『英国農業』 (*English Agriculture*) のなかで、こう述べている。『ピュージ氏が新規の農機具の導入によって、彼の居住地域にもたらした恩恵は、農業者たちが容易に感得しうるものである。農業者たちは、ピュージ氏によって成功が実証されたものを採用し、ピュージ氏が失敗したものは避けるという形で、利得しうるのである。』ピュージは、英国農業について、新知識を利用するならば保護政策なしに繁栄できると確信していた。1852年、選挙区民への告別の辞のなかで、こう言っている。『笑止の沙汰であるが、保護政策は、本年、その反対者の攻撃によってではなく、その支持者の逃亡によって、崩れ去ってしまった。……改良こそは、何物にも代えがたい強味をもっている。改良に強力に反対を唱えている者も、雄弁をふるうことばかりしていないで、新しい肥料や敏捷に動くようになっている機具を試みてみれば、たちまち秘かに感嘆してその購入に同意するはずだ。』彼は、借地農業者が土地を最大限大切に有効に使えるようにするには、保有の安定と、

保有権の侵害に対する補償とが不可欠であることを、理解していたので、この問題を議会でとりあげられるように事を運び、1848年にはこの問題の検討のための特別委員会が設置されることになり、自ら議長の席についたのだった。彼は、自分の地所に関してこの上なく開明的な地主であり、小屋の再建その他彼の地所で働く労働者の福祉のためにあらゆる注意を払った。1855年、時期尚早の死が彼を連れ去ったことは、農村にとって悲しくも大きい損失だった。20年後、ディズレリイ (Disraeli) は下院でこう演説した。『ピュージ氏は、その血統をみても、その地所をみても、類まれなたしなみの良さをみても、優れた才能をみても、かつて下院に席を有した人々のなかで最も傑出した農村のジェントルマンであった』 (Orwin & Whet- ham, pp. 51-2)

ピュージ報告について

この「フィリップ・ピュージ」の説明のなかに出てくる1852年の選挙区民への告別の辞については、『王立イギリス農業協会会報』 (*The Journal of the Royal Agricultural Society of England*) の1900年度分に掲載されたアーネスト・クラーク『フィリップ・ピュージ』 (Ernest Clarke, 'Philip Pusey') から引用された旨の註記がある (Orwin & Whet- ham, p. 52.)。

クラーク『フィリップ・ピュージ』³⁶⁾ は、より詳細であって、例えば、マルクスが「王立農業協会会長ピュージ氏」としている部分について、ピュージが会長職についていたのは1840—41年と1853年以降であるということを知りうる

36) Ernest Clark, Philip Pusey, *Journal of the Royal Agricultural Society*, 1900, pp. 1-18.

(pp. 7-8)。また、ピューージが農業協会の会報誌に書いた論文は47本に達することやそのなかで重要なもの9本の表題も記されている。そのなかに、マルクスが論拠とした経営費半減云々の文章を含む『大博覧会農業機具報告』“Report on the Agricultural Implements at the Great Exhibition,” Vol. XII., 1851 の名もみえる (p. 18)。

1851年の会報誌に掲載されたピューージの報告の表題は、正確に言えば、*Report to H.R.H the President of the Commission for the Exhibition of the Works of Industry of all Nations. On Agricultural Implements, Class IX. By Ph. Pusey, M. P.* である。会報誌の587頁から651頁まで65頁にわたる。1851年の万国博覧会に出品された農機具に関する説明書であるが、博覧会委員会会長に提出されたものの再録と考えられる。委員会会長に提出されたものは、同じ表題で67頁(ただし本文だけでは65頁)の単行本として刊行されている³⁷⁾。

単行本の58頁、会報誌の642頁に、次のような文章がある。

the efforts of agricultural mechanists have been so far successful, as

37) Philip Pusey, *Report to H. R. H. the President of the Commission for the Exhibition of the Works of Industry of all Nations. On Agricultural Implements, Class IX.*

筆者は、1974年に農林省農業総合研究所エイメリー文庫にある単行本を最初に読んだ。単行本の背表紙の表題は、Philip Pusey, Report on Agricultural Implement である。刊行日付はない。会報誌と同じ報告が含まれていることを知ったのは1980年に入ってからである。マルクスは、単行本と会報誌とのいずれによったか、それは不明である。なお、ピューージ報告の閲読については、農業総合研究所の齊藤 仁(現千葉大学)、是永東彦、高橋 満(現東京大学)、小沢健二の四氏に負う所が大きい。

in all these main branches of farming labour, taken together, to effect a saving, on outgoings, of little less than one-half. 農業機械技師たちの努力が大きく実を結んで、農業労働の主要分野で、合算すると経営費をほとんど半分までにまで節減できるほどである。

マルクスが、「王立農業協会会長ピューージ氏は、新たに採用された機械によって(相対的な)経営費がほとんど半減されたということを断言している」と書いたのは、この部分に依拠してのことだったと考えられる。

ピューージ報告は、次のような事項を扱っている。

(1) Instruments of Tillage

- 1 Plough
 - 2 Harrow
 - 3 Rollers
 - 4 Clodcrushers. Norweigan Harrow
 - 5 Scarifiers, Grubbers, or Cultivators
- Implements used in the Cultivation of Crops

- 1 Drills
- 2 The Top-dresser or Manure-distributor
- 3 Press-rolls
- 4 Horse-hoes

(2) Harvesting Implements

- 1 Reaping machine
- 2 Horse-rakes
- 3 Hay-makers
- 4 One-horse Carts

(3) Preparation for Market

- 1 Movable Steam-engines
- 2 Threshing-machine

- 3 Winnowing-machine
- (4) Machines for preparing the Food of Stock
 - 1 Turnip-cutter
 - 2 Chaff-cutter
 - 3 Linseed and Corn Crushers
 - 4 Oil-Cake Bruisers
 - 5 Mills for grinding fine Meal
- (5) Churns
- (6) Draining
 - 1 Tile Machines
 - 2 The Draining Plough

(1) 犁・馬鋤・地均し・土掻きなどの耕起用具、条播・施肥・除草などの栽培用具、(2) 穀物を刈取る機械・刈倒した飼料用穀物や牧草をかき集める道具・刈取った牧草をかきまぜて乾燥を早める道具・運搬に使う一頭びきの馬車などの収穫用具、(3) 蒸気機関と脱穀および選別など出荷用具、(4) かぶ・藁・亜麻の実・油粕などを家畜の口に合うように切り刻んだり、大麦・燕麦などを荒粉にしたりというような飼料用具、(5) 牛乳攪拌器、(6) 従来は排水溝に使うタイルを手で作っていたのに対して、箱に陶土をつめてそれをパイプでマカロニが出来るようにくりぬくという方式に代って費用を半減できるようになったこと、排水溝を掘る犁に非常に効率のよいものができたことなど排水装置に関する事、——こういう事項について、ほとんどすべて図解入りで説明されている。これらの事項を、マルクスの叙述第一例でとりあげられている技術改善の諸項目と照合してみると、ほとんど重なりあっていることが判る。そして、マルクスが、経営費が半減されるほどに英国農業における穀物法廃止後の生産力上昇が顕著であったと述べたとき、重要な判断材料に

なったのが、このピューージ報告だった——そういう考え方は、ますます確実さを増してくる。

そうであれば、マルクスが引用している「経営費半減」ということは、事実なのか否かが、重要な問題になってくる。

ピューージ報告そのものに立ち帰ってみる。単行本 57—60 頁、会報誌 641—644 頁は、各種機具について説明を加えてきた後の総括部分である。その部分に「経営費半減」という言葉も含まれている。ピューージの叙述は、次の通りである。

「さて、次のことは明らかになったと言ってよいでしょう。スペンサー伯、ハントレイ氏、その他の現存の方々によって全国年次機具展覧会が開催されるようになって以来、12年間に、古くからの機具は改良され、新しい機具が考案されました。いまやそれらがどのていど節約の効果を発揮しているか、その働きぶりを調査することが必要になっております。節約の効果を詳細に確かめることは、困難ですが、様々の場面での取扱いを見たり、ある牧畜場主がこれまでのものより軽い犁で農場の整備をすることになって3頭いた馬を1頭は手離すことができるようになり、また簡便な道具を採用することになって耕起作業を大部分せずすませられるようになるという話、条播栽培にすることで馬匹労働がいくらか軽減されたり種子がいくらか節約されたり肥料の量が大幅に削減できたり、同時にまた馬でひく除草器が2分の1の出費でふつうの除草器に取って代れるという話、収穫のときにアメリカ製収穫機が30人の男と同じ仕事をできるし、丁度半分の馬匹数ですむスコットランド式馬車がイングランド式馬車にとって代れるという話、食料用穀物に蒸気機関式脱穀機を使うと従来の費用の3分の2を節減できる

Report to H.R.H. the President

prosperity of so important a body of men, may be thought in some degree to claim even national importance, and the claim alone will, I well know, have secured your Royal Highness's indulgent attention.

It seems proved, then, that within the last twelve years, since annual country shows of implements were established by Lord Spencer, Mr. Handley, and others yet living, old implements have been improved, and new ones devised, whose performances stand the necessary inquiry as to the amount of saving they can effect. To ascertain that amount precisely is difficult; but, looking through the successive stages of management, and seeing that the owner of a stock-farm is enabled in the preparation of his land, by using lighter ploughs, to cast off one horse in three, and by adopting other simple tools to dispense altogether with a great part of his ploughing—that in the culture of crops by the various drills horse-labour can be partly reduced, the seed otherwise wanted partly saved, or the use of manures greatly economised, while the horse-hoe replaces the hoe at one-half the expense—that at harvest the American Reapers can effect thirty men's work, while the Scotch cart replaces the old English waggon with exactly half the number of horses—that in preparing corn for man's food the steam threshing-machine saves two-thirds of our former expense—and in preparing food for stock, the turnip-cutter, at an outlay of 1s., adds 8s. a-head in one winter to the value of sheep—lastly, that, in the indispensable but costly operation of draining, the materials have been reduced from 80s. to 15s.—to one-fifth, namely, of their former cost; it seems to be proved that the efforts of agricultural mechanists have been so far successful, as in all these main branches of farming labour, taken together, to effect a saving, on outgoings, of little less than one-half.*

This saving of labour or expense, though large for land—a material certainly very intractable—is small as compared with the saving effected in the weaving of calico or the knitting of stockings. But it is important to observe, on the other hand, that the cost of the means which produce the saving is comparatively insignificant. When the distaff and knitting-needle were abolished, huge factories had to be built, and filled with intricate clockwork of spinning-jennies and looms, costing thousands of pounds. In agriculture we buy a few simple durable tools; and it is evident that a farmer setting up now in business, who, instead of the old waggons with three horses each, should buy one-horse

* As mere reasoning seldom carries conviction, I may be permitted to mention that whereas in estimates by excellent farmers 12 horses are still assumed to be necessary for a farm of 400 acres, though with improved farming, I find now that I can work 460 acres of a mixed farm with 8 horses, which are by no means confined to the work of the farm.—Ph. P.

carts, and the smaller number of horses required by such carts and by other improved machinery, would find that, without any increase of outlay whatever beyond the old scale, he could acquire all requisite modern machinery, with one exception, indeed—the steam-engine, but the steam-engine is often hired. It is therefore also demonstrated that *the new agricultural machines have, with reference to the amount of saving produced by them, the merit of very great cheapness.*

There is a further effect of machinery upon agriculture which has hitherto been overlooked. The main difficulty of farming has always lain in its uncertainty. Though machinery has not altogether cured, it certainly has much mitigated, this evil. On undrained clays a wet winter may destroy half the yield of the wheat. On the same land drained, the wheat may escape altogether unhurt, and you may also plough heavy land in wet weather when drained, though you could not before. Upon any land wheat may suffer in winter, but in spring the presser settles it in its bed, and the manure distributor with a cheap sprinkling restores it to vigour. In sowing barley earliness may save the crop; but the ground is often too cloddy, though the season is wearing away, and May-drought approaching. This cloddiness may be prevented, as has been said, by the paring plough, or, if it could not be prevented, may be remedied by the clod-crusher, or Norwegian harrow; and besides these implements, the cultivator does the plough's work in one-fourth of the former time, thus enabling the farmer to profit by the auspicious hour of seed-time. And so too with the turnip: the land, being prepared for it in the previous autumn and winter, is moist to receive the seed; the dry drill, supplying it with superphosphate, saves it almost certainly from the fly; or yet more, the water-drill, anticipating the clouds, makes its seed-time independent of weather, while the horse-hoe afterwards preserves it from neglect in the busiest harvest-time. Again, while machinery remedies the absence, it also guards against the inconvenient arrival of rain, by making our hay and now even reaping our corn while the sun shines. It may be further said then, that *machinery has given to farming what it most wanted, not absolute, indeed, but comparative certainty.*

I wish I could add that the use of machinery has advanced as rapidly as its improvement. Still it has advanced greatly, as is shown by the increase not only of implements but of eminent implement-makers, and the sale has never been so great as it has been this year. Yet even the best new machines are not yet adopted into general use. This incomplete progress may, however, easily be accounted for. The farmer, whose life is secluded, has little opportunity of seeing them, and it is remarkable that nearly all our first implement makers live on the east

という話、家畜のえさを用意するのにかぶ切りを導入すると1頭あたり1シリングの支出でひと冬に8シリングずつ羊の価値を増すことができるといふ話、最後に、排水というのは欠かせないのだが多額の金が必要、その材料代が80シリングから15シリングに、つまり従来の5分の1に減じているという話を考えたりしますと、こう言えるように思います。農業機械技術者たちの努力が大きく実を結んで、農業労働の主要分野で、合算すると経営費をほとんど半分にまで節減できるほどである、と。」

このピュージの叙述を一読して明らかになることは、そのほとんどが最新式の機具を使用するならば節減できるという可能性の次元の議論だということである。マルクスが引用している部分にしても、最新の機具を総動員するならば「経営費をほとんど半分にまで節減できる」までに技術は進化していると言っているのであって、可能性の領域に属するものである。現実に当時の英国の農場で「経営費をほとんど半分にまで節減できた」と言っているのでは、決してない。

可能性を述べたものであって、現実を描いたものでないことは、ピュージの叙述を読み進めば明瞭になる。経営費節減の可能性に触れた後、彼は「新しい農業機械は、そのもたらす節減効果に比べてみると大属安価であるという利点に恵まれている事」、「機械は、農業が最も必要としているもの、つまり絶対的ではないにしても相対的安定を保証していること」を強調している。そして次に現実の状況にふれてこう言う。

「機械の進歩と歩調を合わせて機械の使用も急速に進行していますとつけ加えることができるならば嬉しいのですが、現実はそのようではあり

ません (I wish I could add that the use of machinery has advanced rapidly as its improvement.)。機具の増加および立派な機具製造者の増加に明らかなように、機械の使用も大幅に進んでいますし、機械の販売も本年はかつてないほど多数にのぼっております。しかし、なお、最良の新式機械でさえ一般に使用されるに至っておりません (Yet even the best new machines are not yet adopted into general use.)。機械の普及が不十分な理由は、容易に説明できます。農業家たちは田舎に引き籠もって生活していますので、新式機械を実見する機会はほとんどありません。そして、ほとんどの新式第一号の機械製造者はイングランドの東部に、大きな農業改良の発生場所であるあの四州に、住んでいるということも響いていえます。脱穀機について申しますと、これはあまねく普及しているのですが、ごく最近までその機能の記録が何も公刊されていませんで、そのため、ある地方で1日13クォーターしか脱穀できない農業者が、別の地方ではその3倍が1日の並の脱穀量だということをおそらく知ることはできなかったでしょう。」

このピュージの叙述は、いわゆる仮定法過去形で書き始められており、現在の事実と反する願望が示されている。機械の改良のように機械の使用も急速に進んでほしい、そういうピュージの願望を、英国農業の現実裏切っていたのである。

むすびに代えて

ここまでみてきたことを、一般的な形でまとめてみると、次のように言うことができよう。

マルクスの叙述第一例第二例第三例には、機械技術の導入とそれによる過剰人口の形成とい

う論理が共通に含まれていた。

この論理は、資本の運動を一般的抽象的に表現したものとしてみる限り、いうまでもなく妥当性を失わないであろう。

また、農業においても資本主義的経営が展開される限り、このような論理で示される方向に作用する力は絶えず存在するであろう。

したがって、マルクスの叙述は、英国農業の現実と全く無関係ではなく、英国農業の一面を捉えてはいるだろう。個別的部分的にはこのような論理で示される動きが、英国農業にも存在したであろう。

だが、特定の具体的歴史段階における農業の基本的特徴を考察する際には、少なくとも、農業は多数の小生産者を擁していることおよび有

機的生物的過程を不可欠の要素として含んでいることから資本主義にとっていわば苦手の存在であり、資本主義的経営による農業生産の制握は種々の限界を画されるという点への配慮が必要となる。別言すれば、資本の論理だけではおおいえない面が大きく残るのである。

マルクスの叙述は、一九世紀中葉の英国農業の全般的基本的動向を捉えるのに成功してはいないであろう。そこでは、資本の運動の一般的抽象的論理にひきつけて現実がみられ、資料が読まれる傾向が強い。特定の具体的歴史段階の動向を表現したものとしてマルクスの叙述を採用することには、十二分に慎重でなければならぬだろう。

(1980. 3. 14)